

令和元年6月16日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16792

研究課題名（和文）19世紀環大西洋交流与「アメリカン・ルネサンス」リバイバル

研究課題名（英文）Transatlantic Relations in the 19th century and American Renaissance Revival

研究代表者

貞廣 真紀（SADAHIRO, Maki）

明治学院大学・文学部・准教授

研究者番号：80614974

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカン・ルネサンスの作家たち（特にメルヴィル、ホイットマン、ソローの3人）が世紀末のイギリスでどのように評価され、特に社会主義の国際ネットワークにどのように位置づけられてきたのか、受容の実相とその影響について調査を行った。その際、受容における物質的条件（国際著作権、出版社の政治傾向など）や、従来軽視されてきた英米の批評家の活動を合わせて検証することで、ナショナリズムの枠に収まらない環大西洋文学交流の位相で「アメリカ古典文学」を理解することが可能になった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、19世紀中葉のナショナリズムの中で花開き、冷戦時代の例外主義の中で再評価されてきたアメリカ古典文学が、世紀転換期のイギリス文壇や社会主義運動との関係の中で再評価され、その輪郭が形成されたことを明らかにした。本研究の学術的意義は、古典文学をより流動的で相互干渉的な環大西洋文化交流の文脈に位置つけた点にある。それは、19世紀のトランス・ナショナルスタディーズに貢献すると同時に、文学史の「時代区分」としての「アメリカン・ルネサンス」の見直しにもつながる意義を有するものである。

研究成果の概要（英文）：This study explores the ways and the extent to which writers of the American Renaissance (Herman Melville, Walt Whitman, and Henry David Thoreau in particular) were involved in transnational socialist networks in Fin-de-Siecle Britain. By paying attention to both the conditions of literary reception (such as the international copyright controversy and each publisher's political orientation) and the frequently marginalized roles of their contemporary literary critics, I remapped a transnational construction of classic American literature. It also challenges the ordinary understanding of the rigidity of literary periods and instead provides an example of a more dynamic and transtemporal historical formation of literary history.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：トランスアトランティック 文学史 アメリカ文学 ハーマン・メルヴィル ウォルト・ホイットマン
イギリス社会主義 世紀末

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2012-2014 年科学研究費採択課題(「19 世紀後半における「アメリカ詩」の確立とインターナショナルリズム」課題番号:24720136)において、ハーマン・メルヴィルと同時代の詩人や E.C. ステッドマンら批評家の活動を比較考察し、アメリカン・ヴィクトリア詩が生成・受容された文化空間の再構成を行った。戦後期の詩がトランスナショナルな社会変動との関連で論じられることは稀だったが、この研究によって、南北セクショナルリズムを超越するためのナショナルリズムの勃興と国家領土拡張を目指すトランスナショナルな文化交流が共犯関係にあること、そして、「アメリカ詩」の形成とキャノン化の動きが、そうした社会の中で生成されていたことが明らかになった。この研究の成果から、分析の対象を詩ジャンルに限定することなく、小説やエッセイを含めた大局的な観点から 19 世紀アメリカ文学の背景を記述することが可能なのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究が特に着目したのはイギリスの社会主義運動とアメリカの作家、批評家との関係である。奴隷解放運動や選挙権拡大運動が環大西洋文化交流に重要な役割を果たしたことについては先行研究があるが、その後 19 世紀後半のイギリスで展開したラファエル前派やフェビアン社会主義者の文学活動とアメリカ作家の関係についての本格的な文化研究は僅少で、調査が不十分な状況にあった。

そこで、本研究は「アメリカン・ルネサンス」の時空間を流動的(すなわちトランスナショナル/トランステンポラル)に捉える 2 つの視点を以下のように設定して文学史を見直すことを試みた。

(1) 環大西洋批評空間と「アメリカン・ルネサンス」リヴァイヴアルの検証

19 世紀中葉、アメリカの知的独立を求める気風の中で多くの文学作品が生み出されたが、そこで活躍した作家たちの再評価は、従来 1920 年代から F.O. マシーセンによる *American Renaissance* (1941) の出版時期にかけてなされたと考えられており、20 世紀後半にキャノン見直しが進められた際も、その 20 世紀的起源が疑問視されることはなかった。しかし、「アメリカン・ルネサンス」作家のキャノン化の土壌はイギリスの世紀転換期に準備されている。本研究の目的の一つは、雑誌等の同時代一次資料および、従来あまり重視されてこなかった批評家の活動や出版社の動向を分析することで、19 世紀末の文学史・思想史・文化史の観点からリヴァイヴアル現象の実相を解明することである。特にメルヴィルやホイットマンの場合、晩年の作品は保守的な作品として軽視されることが多かったが、彼らの晩年の活動をイギリス社会運動家・批評家の活動と相互影響関係の文脈に位置づけ、作品の評価軸そのものを探ることも狙いとしていた。

(2) 英米関係を複雑化する要素への注目

ホイットマンやメルヴィルを対象とする環大西洋文学研究はアメリカとイギリスの二国の権力関係を中心に考察されることが多かったが、本研究のもう一つの目的は、フランス文学・批評の影響とオリエンタリズムにも目を配り、20 世紀モダニズム以前のトランスナショナルな文学の生成を考察することである。それは、帝国化に邁進するアングロ＝アメリカニズムのイデオロギーの内部で発生した抵抗文化の連携関係をたどる試みでもあった。

3. 研究の方法

スコットランド国立図書館および大英図書館アーカイブを利用し、電子化されていない 19 世紀資料や書簡、雑誌資料(19 世紀末イギリスの社会主義系グループの機関紙等)の検証を行った。また、国内外の学会でアメリカン・ルネサンスや環大西洋研究の研究者に向けて研究成果を公開し、議論の妥当性を確認しながら研究を進めた。研究方法として特筆すべき点は以下の 3 点である。

(1) 「アメリカン・ルネサンス」作家の同時検証

イギリス側とアメリカ側で、それぞれどのような社会背景が「アメリカン・ルネサンス」の発見を促したのか、その解明を行った。イギリスの社会改革者たちによるアメリカ文学再評価において、メルヴィル、ホイットマン、ソローの評価が同時並行的に行われていた点を重視し、ホーソン、ポーも含め、作家それぞれの個別の受容についてケーススタディを行った。ホイットマンの受容については、アメリカとヨーロッパに充実した環大西洋研究があるため、先行研究を他の同時代作家の研究に応用し、「アメリカン・ルネサンス」の形成を、集合的な文学運動として見直すことを試みた。

(2) 批評家たちの活動への注目

解釈の共同体は、作家と読者によってのみつくれるわけではない。本研究では、それを媒

介する出版社や批評家が作り上げる人間関係のネットワークを再構成し、作家や作品がその中でどのように位置づけられてきたのか、また、彼ら自身がそれをどのように考えていたのかという観点から、作品を複層的に検証した。

(3) 時系列の流動化

作品の受容は必ずしもその発表順に行われるわけではない。本研究では、それぞれの作家と作品の執筆年、発表年だけでなく、受容の時間を重視した。メルヴィルやホイットマンが社会主義者たちと交流を持ったのは晩年だが、社会主義者たちが読んでいたのは初期作品が多い。初期作品が再版の際にどのような新しいコンテキストに組み入れられたのか、複数の版の比較を行い、流通の経路の確認とその選択の政治的意図についても考察を行なった。

4. 研究成果

本研究では国内外の学会で成果発表を積極的に行い、多くのフィードバックを得ながら研究を展開することで、予想を超える多くの成果を上げることができた。主な研究成果は以下の通りである。

(1) イギリス社会主義運動とアメリカ文学史の再構築関係

本研究では2回のイギリス出張を行い、社会主義グループの機関紙の調査を行った。いまだ揺籃期にあった多くのグループの政治主張はしばしば一貫性がなく、構成員も流動的であることがわかった。それぞれのグループの政治的意図の変遷や人間関係とテキストの流通経路など、その活動の全様解明には調査の継続が必要だが、今回の調査により、イギリスの社会主義がどの作品をどのように受容しようとしていたかについて、作家別に検証し、その枠組みを解明することができた(学会発表2と4と8および出版予定図書有)。また、アメリカの作家たちの応答についても、ホイットマンとイギリス社会改革者の間の相互依存関係やメルヴィルの読者意識やその表現を分析した(図書1)。さらに、イギリスの「アメリカン・ルネサンス」作家たちの受容が、アメリカの文壇のよるアメリカ文学評価と、時に協調関係、時に競合関係にあったこと、アメリカ文学史発生のトランスナショナルな射程とそのダイナミズムについて記述することができた(学会発表3と6と11)。

(2) 環大西洋批評空間の多元化

本研究では英米関係を扱うのと同時に、それがどのようにトランスナショナルかつトランステンポラルなアメリカ文学史を形成してきたのかを考察した。ホイットマンが大西洋横断電信ケーブルを描く際、イギリスによるインド支配における帝国主義的テクノロジー利用を暗に批判していることや(学会発表5と図書2)、イギリスの側でソローを紹介した社会改革者ヘンリー・ソルトがソローを菜食主義の文脈で評価していたこと、それがインドの独立運動の主導者であるマハトマ・ガンジーとソローの接点となったことについて考察を行なった(学会発表1)。また、ソルトは日本の社会主義思想家とも交流を持っていたことから、日本における「アメリカン・ルネサンス」作家の受容の系譜についても調査を行い、特にホイットマンと柳宗悦と民藝運動との関係について発表を行った(学会発表7)。

「アメリカン・ルネサンス」の形成を空間的に拡張するのに加え、冷戦期以降に複数作られたアダプテーション作品をトランスナショナルな観点から分析することで、19世紀作品の受容と解釈を、より長い時間軸で環大西洋批評空間に位置づけることが可能になった(学会発表9と10および出版予定図書有)。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 11 件)

1. 貞廣真紀、「大西洋を渡る知識人たち—世紀転換期における「文化」論争について」、神奈川大学人文学研究所主催講演会、2019.1.25、神奈川大学(神奈川県)。
2. 貞廣真紀、「The Poetics of Failure: Socialism and Emotion in *Billy Budd*」、The 116th Annual PAMLA Conference、2018.11.9、ベリンガム(アメリカ)。
3. 貞廣真紀、「『白鯨』とアダプテーション」日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部会例会、2018.9.30、専修大学(東京都)。

4. 貞廣真紀、“The Birth of the American Poe and the Transatlantic Triangular Literary Exchanges”、International Poe & Hawthorne Conference、2018. 6. 22、京都ガーデンパレスホテル（京都府）。
5. 貞廣真紀、“The Beauty in the Ordinary: Whitman and the Japanese Folkcraft Movement”、The 11th Transatlantic Walt Whitman Symposium、2018. 6. 1、ドルトムント（ドイツ）。
6. 貞廣真紀、「アメリカ文学史の起源—1880年代イギリスから F.O. マシーセンへ」、明治学院大学言語文化研究所主催シンポジウム、2018. 3. 6、明治学院大学（東京都）。
7. 貞廣真紀、“America as an Island: Walt Whitman and Naval Imagination”、The 115th Annual PAMLA Conference、2017. 11. 10、ホノルル（アメリカ）。
8. 貞廣真紀、「19世紀末イギリスにおける社会主義ネットワークとメルヴィル」、日本メルヴィル学会年次大会、2017. 9. 10、専修大学（東京都）。
9. 貞廣真紀、“Transnational Solidarity or Struggle: The Dawn of the Melville Revival”、The 11th International Melville Society Conference、2017. 6. 27、ロンドン（イギリス）。
10. 貞廣真紀、「世紀末イギリスの社会主義とナサニエル・ホーソン」、日本ナサニエル・ホーソン協会第36回全国大会、2017. 5. 20、レイアップ御幸町ビル（静岡県）。
11. 貞廣真紀、“Meat and Shame: Thoreau, Gandhi, and the Vegetarian Connection”、The 15th Annual Hawaii International Conference on Arts and Humanities、2017.1.8、ホノルル（アメリカ）。

〔図書〕(計5件)

1. 貞廣真紀、「島嶼国家アメリカへの道—再建期、大西洋横断通信ケーブル、ホイットマン」、『海洋国家アメリカの文学的想像力—海軍言説とアンテベラムの作家たち』、開文社、2018。
2. 貞廣真紀、「世紀末イギリス社会主義者たちの アメリカン・ルネサンス>」、『繋がり
の詩学 近代アメリカの知的独立と 知のコミュニティ の形成』、彩流社、2019.2。